

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.65 (深緑号)

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

2016年7月10日発行

<http://iidalaw.net/norikura.html>

もっと乗鞍岳のことを知ろう

[その6]

木下喜代男



写真1

今年も沢登りのシーズンが到来した。夏雲の下で山がもたらしてくれる清冽な水に浸り、人跡稀な秘境に分け入る面白さは格別だ。今回も皆さんを涼しい乗鞍岳の谷へとご案内したい。

乗鞍岳の谷 3- 阿多野郷川・東谷 美しい幻の大滝がある谷

・遡行月日 平成24年8月5日

・同行メンバー 飛騨山岳会 Fさん

高根町阿多野郷の集落へ落ちる阿多野郷川は、上部で黒谷、真谷、東谷に分かれている。このうち東谷には「幻の大滝」があるとFさんから聞いていたので、一度見てみたいと思っていた。

今では限界集落といわれる阿多野郷を過ぎてキャンプ場を通り、森林管理署のゲート前に駐車。このゲートの前の橋の下を流れているのが東谷だ。笹に覆われた右岸の小道を少し歩いてから入渓。途中二つの砂防堰堤が現れ高巻くが、最近はこの人

工物を意に介さなくなった。このあとは滝が少ない平凡な谷が続く。

1時間ほど遡ると、突然大滝(写真1)が現れる。笠谷のような一条の垂直瀑布ではなく、落差100mほどのなかに、最上部は垂直、一段おいたあと二股になって、それぞれ布引、階段状とバラエティーに富んだ滝が混在している。これがうわさの幻の滝だ。美しい布引き部分のクライミングを



楽しみながら上部へ。標高 3,000m からの水はかなり冷たく、ホールドをまさぐる手がかじかむ。まさに「年寄りの冷や水」を画に描いたようなクライミング。(写真 2)

最上部の滝は突破不可能なので右の灌木帯をまいて落ち口に立つ。ここから上部は平凡であろうとのことなので、しばらく休んでからロープを使って懸垂下降で滝を下り、往路を戻る。

今日は久々に大きい、美しい滝に出会い、そして少々クライミングでハラハラドキドキ感も得ることができ、満足した。深山にあるためか、この滝にはまだ名が付いていないようだ。

乗鞍岳の谷 4- 阿多野郷川・真谷 源流部のお花畑へ

・遡行月日 平成 23 年 7 月 24 日

・同行メンバー 飛騨山岳会の中年男性 3 名

阿多野郷川の三本の谷のうち真ん中の真谷(しんたに)だけがいちばん長く、乗鞍岳頂上からの千町尾根へ突き上げている。滝も多く、源流部のお花畑に到達できて、笠ヶ岳西面の谷同様満足のゆく遡行ができた。阿多野郷という地名は、今でこそ 20 軒ほどの小さい集落を指すが、昔の阿多野郷は、旧高根、朝日村と久々野町の一部を含んだ広範な地域だった。

ひっそりとした集落を過ぎ、キャンプ場の前を通って林道を進むと森林管理署のゲートへ。この前に駐車して林道を 15 分ほど歩くと真谷にかかる橋へ出る。橋を渡って右岸下流から入渓。はじめは平凡な谷だが、後半結構な滝が連続して現れ(写真 3)、クライミングが楽しめた。源流部に近くなると一条の 65 度くらいの傾斜の長い滝(写真 4)が現れたが、兩岸がしぶきで濡れているのでこのクライミングは緊張した。(写真 5)

メンバーの力量がそろっていたため終始ロープを出さずに済んで結果時間の短縮ができたが、リスク管理上この部分ではロープを使うべきであったと後から反省。最上部に雪渓が残っているため先日の九蔵谷とくらべ水がかなり冷たく、泳ぐ気はしなかった。途中にも雪渓がありピッケルが必要だとの情報を得たので持参したが、雪の欠片があるだけであった。大きい滝が尽きたあたりで昼食をとる。いろんな花が咲き乱れる源流部を直上。

最上部の崖(写真 6)の手前で進路を左にふり、少しお花畑を歩いたら大尾根から分岐している阿多野登山道の最上部に出た。標高 2,662m のガスがまく広い尾根は高山植物が満開で、雷鳥の親子が遊んでいた。久しぶりの阿多野登山道を下る。最近通る人がないようで、上部はハイマツが覆い、下部は笹に埋もれようとしていた。

久々にいい沢登りができた。山スキーと沢登りは、道のないところを自由に漂泊できるのがまことに楽しい。「沢登りは人工物が全くなく、滝が多く、かつ源流部へ到達できるルートが最上」などとうるさい事を言っていたら、若い人が注文に応じてくれ、コンパクトながらいいルートに連れていってくれた。



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6

<参考タイム>

駐車場所 8:06 入溪 8:20 稜線 13:40~55 駐車場所 17:00

自然の恵みを生かす ～ふるさとの自然～（その2）

日本自然保護協会参事 横山隆一

録音文字化：住 壽美子

日本とイギリスは大きさが良く似ている。かつて両国の生物数を調べた人がいたが、哺乳動物は日本では130種類、イギリスは60種類、鳥は日本で繁殖しているものが523種類、イギリスは218種類、トンボは日本では186種類、イギリスは54種類、チョウは日本では286種類、イギリスは70種類であった。同じような土地の広さなのにどうして日本には色々な生き物がいるのか。ヨーロッパ、イギリスは自然保護が進んでいるというイメージを持つ人がいるか

第1-2-3表 我が国と英国の生物相の比較

分 類	日 本	英 国
脊椎動物	(種)	(種)
ほ 乳 類	130	60
鳥 類	523	218
は 虫 類	76	6
両 生 類	48	9
淡水魚類	183	60
無脊椎動物		
昆 虫 類		
トンボ目	186	54
鱗し目(チョウ類)	286	70
真性くも類	997	611
貝 類(海産のものは除く)	730	200
植 物(シダ植物以上の高等植物)	5,600	2,500
国 土 面 積	37万平方キロメートル	24万平方キロメートル

も知れないが、私はあのような所の自然保護は明日にでも出来ると豪語したくなる。なぜなら守らねばならない自然が単純だからだ。日本には沢山の生き物たちが一つの森にごちゃっと棲んでいる。守ろうと思っても複雑なので守りにくい。絶滅が心配されている哺乳動物でも、130種の中の4分の1と、60種の中の4分の1とでは対処せねばならないものが日本の方が3～4倍も多い。そのことに日本は困っている。

植物についてみると日本は5,600種、イギリスは2,500種。又ヨーロッパの鳥の図鑑は1冊しかない。北欧からアフリカの北まで一冊で済む。渡りをする鳥においても縦（南北）に渡りをするので、それも1冊で済む。ところが日本の場合は図鑑を作ると分厚いものになってしまう。渡り鳥の渡りをする所と渡って行く所を含めると、北極圏からオーストラリアの南までの範囲となり、1冊にまとめると重さにして5～6キロkgにもなり、自然観察会の時に図鑑を担ぐ人を作らなくてはいけなくなる。それくらい**日本の自然は複雑**である。

生物多様性の危機とは、生態系が壊れる、生物が絶滅していく、遺伝的にも単純になっていくという事であるが、その原因には大きく分けて3つある。一つに人間の社会を作る活動、**開発による危機**で、生き物の過剰な捕り過ぎなどで、生き物が生活し子育てをしていく環境が壊されることが一番の原因であるが、ここ20年くらいの間にクローズアップされてきた二つ目の原因に**人間活動の縮小**による危機が有る。つまり昭和20年代後半から薪や炭を使わなくなった、又草を刈って家畜に与えることをしなくなり、薪炭利用や採草をしていた場所の自然が放置されるようになった。こうした中で起こっているのが、シカという増えやすく減りやすい動物が日本中で増えてきたことである。絶滅しそうな生き物がいる一方で、他方ある種が増える。昆虫のような増え方で増えている哺乳動物がいる。シカは1年に1頭ずつ子どもを産むが、生まれた雌は翌年にはもう子どもを産む事が出来るため、ネズミ算式に増えていく。

現代の日本人は、身の回りの自然を一切利用しなくても日常生活が送れるようになった最初の日本人である。我々の両親、祖父母の時代は生活物資の半分は買って来るが、半分は山や畑から採ってきて生活していた。このような生活がこの50年間ですっかり無くなってしまった。このことが

日本の環境を大きく変えた。三つ目に人間により自然界に持ち込まれた物による危機があげられるが、外来種と言われる外国から持ち込まれたもの、あるいは国内の他地域から持ち込まれたもの、つまり**自然の分布を越えて生態系へ人間によって持ち込まれた物が色々な所で悪さをしている**。開発が環境を変える事がどの程度行われたかを知るデーターとして、青森県の下北半島の森の分布を調べたものが有る。1947年にあった自然の森が30年後の1986年には人工林が増え、自然の森は少なくなっている。人工林が増えることで何が起こったかと言うと、北限のサルや北限のニホンカモシカが、畑を荒らす害獣となった。野生動物が害獣となるときは、このような大きな攪乱が人間によって起されている。

自然を守る方法はどうしたら良いか。生態系を守るには、森は自立しているので、あるいは自立的な仕組みを持っているので自立や自律に必要な要素を乱さない事が大切、つまり顔ぶれを変えない、ひとまとまりと思われる範囲を壊さないようにする。先述の下北半島はひとまとまりであったが、まとまりが崩れて**自立性が崩れ、自分の力でコントロール出来なくなり**森の動物が暴れ出した。生き物を種で考えると色々な生き物が必要とする各々のハビタット（生育環境）を壊さない。各々が必要とするハビタットをこわさなければ絶滅するものはいない。遺伝子の多様性についてはそれを高めるためにはあるいは低めない為には、持ち込まない・持ち去らない・混ぜない事が必要。持ち込まないと混ぜないは混血を作らない、又は野生に逃げていくものを作らない事である。持ち去らないは、結果として他地域においては持ち込まれたものとなる為、やってはいけない。

生態系・種・遺伝子をまとめて生物多様性と言うが、これを守る為の世界での取り組みを紹介する。北米と南米の間の中米では国境地帯に自然公園を作ろうとしている。この公園を伝わることで、北米の生き物が南米に、南米の生き物が北米にわたることが出来る。20世紀では何十万エーカーもの広さの自然保護区を一つ作ることが自然保護の大きな目標であったが、いまはそれを縦に並べてつなげようとしている。これをコリドー（渡り廊下）と呼んでいる。自然保護区を作りコリドーでつなぎ、南北の、あるいは高い所と低い所の生き物の交流を守るのが今の主流となっている。

スリランカの例では、ここにはスリランカ象がいるが、この象は海辺と内陸を行ったり来たりす

る。ここでは象の自然保護区、国立公園、川を守るコリドーを作り、海まで繋げようとしている。象は集団で動くため、村が有ると村をつぶして歩き、田んぼが有ると踏んづけていく。象が来ると人間はバケツを叩いて逃げるが追い払えない。象が家を踏みつぶした後で又建て直す、田んぼは播き直すと言うことが繰り返される。ここでは象の保護と村人の農業や町を守る事の両方が必要なので、幅50m位の高速道路のような道の両端に木を植えて、象の通る道を作った。象は木を倒して田んぼに出ることが出来ない為真ん中だけを歩き、両サイドには田んぼが広がっている。つまり象のコリドーである。この道は15年かけて延々150kmくらいのものが一昨年完成した。今行くと「エレファントコリドー」という矢印が出ている。



ムドゥル・オヤ国立公園を中心にスリランカ南東部の自然保護をつなぐ「ゾウの道」計画図

中米コリドー計画



中米の7カ国にメキシコが加わった「中米生態コリドー」計画。人間活動によって社会的に分断されたが、中米はもとも北米大陸と南米大陸を結ぶコリドーだった。世界的な生物多様性の重要地域を国を超えて保護していくという試み。

私たちが群馬と新潟でやっている**赤谷プロジェクト**が有るが、これは生物多様性の復元計画である。12年前に企画した。林野庁に、今まで散々日本の自然林を伐りつくして、自分たちの給料を作っ

てきたことに対する罪滅ぼしを、現代の林野庁の職員でやらないか、これをしないと林野行政は無くなると呼び掛けて、やることになった。どのような事をするかと言うと、一つ目に自然保護団体と林野庁の管理局が生まれて初めて協働する事になったのであるが、10km 四方の川の上流部の集水域の国有林を、地域の人達、林野庁、私たちが共同管理する。二つ目は生物多様性の復元は時間がかかるので、自然の時間や過程を重視した生物多様性の復元、つまりプロセスを重視した取り組み。三つめは生態系サービス（自然の恵み）つまり自然が有るがゆえに、人間にサービスしてくれる事の実感と持続性を作ろうと言うことでこのプロジェクトは始まった。

今までの **20 世紀型自然保護**は、例えばイヌワシとクマタカの絶滅を回避しよう、市民の参加の機会を増やそう、温泉源を守ろう、健全な人工林の管理、自然林を守ろう等々を**一つ一つバラバラの所で**やっていたが、これらを全部重ねて同時に一つの場所で全部を達成する。こういう場所を作っていく。これが生物多様性の復元地域と名付けた最大の理由である。自然林の広がりに戻す事と、猛禽類の繁殖成功率を上げる事をいつも同時にやっていく。一方がバッティングするとか一方が引っ込むと一方が出ると言う関係にならないように**全部両立**する事を考えている。集水域の人工林をゼロにすることを目標にして、昭和 20 年代の森に戻す事を始めて 12 年になる。全部を満足させる共通の目標は**生態系サービスの最大化**である。赤谷プロジェクトエリアの持っている、自然の恵みを供給する力を最大にしよう。その為に炭窯の復活、野生動物の調査、水中に温度計を入れて 12 年間水温の変動を調べる。又 10km 四方の中には溪流を堰き止めるダムが沢山あるが、それを一つずつ壊して人工の滝をなくす。それにより魚が上流に登る、カワネズミが行動圏を広げる、イワナが上流に登るとそれをクマやテンが食べにくる。

世界でやっている事の基本になっている生態系サービスが、何故大事か。私達が自然から貰っているサービスには 5 つある。一つは安全、二つ目は生活の基本物資である食べ物、着物、住まい等、三つめは健康、四つ目は良好な社会的関係である。この四つと言うのは、とても大きなサービスである。日本人は、食べ物や材木等の二つめのサービスである生活基本物資のみが自然の恵みと思いこんできたが、実はわたしたちが好戦的な民族・社会ではなく、他人を受け入れる事が出来るのは、良い自然に囲まれているため、良好な社会的関係を作る基盤が日本にはあるからである。これらが欠如した国は地球上に沢山ある。それは毎日ニュースに出てくる殺し合いをしている国々である。

五つ目のサービス、実はこれを**日本人は最も理解していない**。自然の恵みの大きな要素は、人間が何かを**選択したり行動したりする自由**は、自然に恵まれた場所にだけ与えられた自然からの恵みであるということ。例えば明日から漁業者になろうとか農業をやって行こうと思った時に、それが出来る場所がある。生き方の選択が出来るのは自然に恵まれているからである。行動の自由、例えば明日山に登ろうと思った時に、登れる山が有ると言うのは自然に恵まれた国の特権である。川で泳ごうと思った時に泳げる川がある。海に入って遊べるのは良い海が有るから。

生物学的な分野から、私たちが必要としている恵みを繋ぐ生態系サービスの中身は四つに分けることが出来る。一つは供給サービス。例えば食べ物等。次に調整サービス。これは天気、温度の調整や動物の数の調整などである。三つ目は文化的サービス。これは例えば綺麗な物を見せてくれる事。そして一番重要なのが基盤サービスで、例えば土壌が有り、その中にミミズがいる、あるいは土壌が雨で流れても落ち葉が積りそれが又土に返って行くというような回復力が有ること等である。この四つのサービスが私たちに恵みを提供してくれる。

自然の保全と共に恵みを生かす、自然の恵みが出る力を維持しようと言う事は、周りの自然をきちんと守ろうとする事になるが、これが自然の恵みだと分かるようになるには自然の保全と共に「**地域知**」という地域の中での**知識の保全が大切**である。これは伝統的な暮らし方、つまり本来は**サバイバルのための知識**であった。色々なアクシデントが起こる長い歴史の中で、作物を育てるならこれにしよう、魚を食べるならこの魚を食べようと言うような事を決めてきて、その地方らしい暮らし方が生まれてきた。この地域知がその地の風土・営みを作る力だが、今の私たちの社会は**この力**

を失いかけている。雑木林から薪を取ってくる、いつも雑木林が若くて美しい状態でいられる。それは営力のおかげだが、この営力をなくした社会では雑木林がどんどん別の物に代わっていくのを見ているしかない。またコミュニティという考えの中で、この中には、異性・異世代・異人種・異種と言うのが存在する。異種と言うのは、身近な自然を守るには、人ではない異種をコミュニティの中に含めて考えようと言う発想である。身近な自然を守るにはコミュニティの中の異種を含めて考えようという発想である。

生態系サービスが分野ごとに低下しているかどうかを世界的に診断した結果、代表的な食物の例でみると海での漁獲量、野生の食料、木質の燃料などは減っている。日本人は薪を使わない生活をしているが、地球的にみて薪がない為に暖がとれない、食事が出来ない人達が沢山いる。その人達が生き残るために、森が無くなっていくという悪循環になっている。水も地球的には減っている。土壌浸食の調整力、水の浄化力、廃棄物の分解力も減り続けている。地球全体の生物多様性の結果としての自然の恵みは減り続けている。

地域知を大切にすること、つまり自然の恵みである生態系サービスを取り出せる人がいないと恵みとして使えない。すごく良い自然の中で暮らしていても、その中から恵みを取り出す知識技術が無いと何もならない。日本人の70歳以下の人は皆戦後生まれで、地域知を使って実際に暮らした経験がない。今のうちに技術のある人から知識、技術を学ばねばならない。奄美大島では小さな木端を鉋で削って売っている人がある。その木端は煎じ薬で症状に合わせて調合してくれる。そんな商売が成り立っている地域がある。又東京には畑が残っている所があり、周囲の皆で気を配って守っている。それは地域知、自然の恵み、それらが身近にあることの大事さを分かっている人たちが守っている。また東京23区の中には商店街が生き残っている地域が多く、スーパーやデパートがあっても、商店街の良さを分かって大切にしている。それを分かるチャンスが地域知と言われるものだ。

自然が無くなり人が活かし方を忘れると、人への恵みが無くなる。今までは自然が無くなると自然の恵みが無くなるだけと思われてきたが、自然が無くなると共に、人がその活かし方を忘れると、人への恵みが無くなると言われている。守りたいのは自然界の色々さ、複雑さであり、これは進化の中で作られてきた自然の仕組みである。このおかげで人も他の生物も生きている。その為には構成要素の維持が恵みの持続性の要となる。このようなことを全国各地でやっていかななくてはならない。唯一の方法は地域ごとにその固有の自然をより良くすること、今の自然を守るのは当たり前で、修復活動を行うことがいい。

今私は毎月岐阜県へ通っている。木曽谷と背中合わせになっている、長野県との県境のあたりである。そこに温帯性針葉樹林の日本で初めての保護区を、ヒノキ林に作っている。そこには400年生以上のヒノキの大木が、数えられるほどではあるがまだ残っている。これがずっと伐り続けられてきて、虎狩り状態になっている。ヒノキは植えれば根付くが、本当に良い物は自然に生え、天然更新したものなので、剥げている所の天然更新を待ち続けて30年経ってしまったが天然更新しない。

人間はヒノキの大木をずっと使ってきたが、資源としてのヒノキの利用は、2,000年も前に都を作る時から伐ってきた。この木を伐った所は大阪、兵庫、香川県にも有った。都を作ったり維持したりすることで大木を全部伐ってしまい、又大木ではないヒノキも伐ってしまい、20世の初頭に

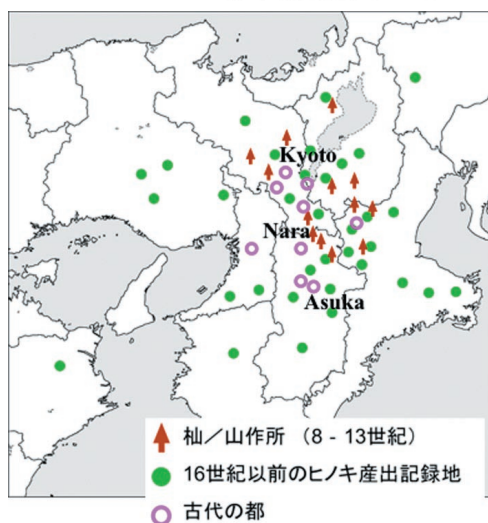
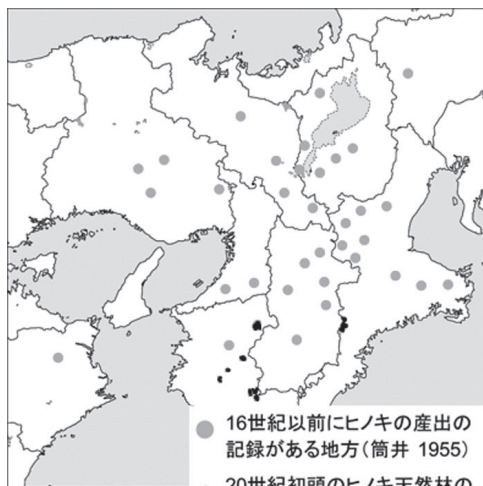
世界的に多くの生態系サービスは低下している

物質的サービス		状態
食糧	農作物	↑
	畜産物	↑
	漁獲量	↓
	養殖水産物	↑
	野生の食糧	↓
繊維類	木材	+/-
	綿・絹	+/-
	木質燃料	↓
遺伝資源		↓
生物化学物質、薬品		↓
淡水		↓

↑ 生態系サービスの増加
↓ 生態系サービスの低下
+/- 明確な傾向がなく、時期による変動や場所による増加と低下が見られる

調節的サービス		状態
空気の清浄		↓
気候の調節(地球規模)		↑
気候の調節(地域・地方レベル)		↓
水循環の調節		+/-
土壌浸食の調節		↓
水の浄化、廃棄物の分解		↓
病気の制御		+/-
害虫の制御		↓
花粉の送授		↓
自然災害の制御		↓

文化的サービス		状態
精神的・信仰的価値		↓
美的価値		↓
レクリエーション・エコツーリズム		+/-



は広くあったヒノキは少しだけ残り、関西地域では全滅した。かつてヒノキの林が有った所は、今は普通の里山になっている。

世界にヒノキの仲間は8種類しかない。アメリカの西海岸、東海岸、ロシア周辺、日本で、どこも海から200km以上離れたところには一本も生えていない。全部太平洋の周りに生えているだけ。日本はその中でも最も固まってヒノキが有った国である。ヒノキは生まれてから死ぬまでに約1,000年かかる。倒れるまでには1,200年かかる。1,200年位の間に、子供、中年、そして老年になって死ぬ。日本にあるヒノキは、今は中学生くらいで全部伐られてしまう。これを私たちは2,000年繰り返してきた。今私達は1,000年も経ったヒノキを見る事ができない。**ある生き物が一生を送る姿を見られない国**にしてしまったのが、私たちの国である。

私は1,000歳のヒノキが見られる場所を木曽の南側に作ろうとしている。人工林を全部伐って元に戻す。人工林の中に混じっている自然林を太らせる、自然林がかたまっている場所を母体として1,000年の森を作る。将来的に元々あった針広混交林が出来たらいいと思っている。約16,000ha位で温帯性針葉樹林の修復地域として林野庁に4年前に持ちかけ、4月1日にこれが出来る予定である。

地域連携促進法という法律が有る。地域の特性に応じた活動を作り根ざさせ、自然の恵みを取り出す場所を作ろうとするものである。高山市は生物多様性地域戦略を日本で最初に

作った自治体の一つである。この促進法は〇〇地区の中に地域連携保全活動計画をつくって、その地域連携を図り、それによって生物多様性の保全活動を行っていく枠組みがこの法律である。これで何をしていくのかと言うと、例えば低炭素社会を作ろうとか、東京では二酸化炭素や生物多様性、森と川と海の保全の為に、もっとお風呂屋さんを作ろうと相談している。昔東京には300mに1軒位の割合で沢山のお風呂屋さんが有ったが、今は殆どなくなってしまった。そこでお風呂屋さんを作って、皆で入りに行こう、1軒1軒でお風呂に入るのはやめようと言うことである。

生き物と人間の関係を絵にした人がいて、20世紀型社会では、ピラミッドの中に生物全部を入れて**頂点に人間の男性が立ち、女性は2段目**に来る。その下に**様々な生き物**がいると言うように描かれている。これを**エゴロギア**とその人は名付けた。これに対し21世紀型社会では、円の中に全ての生き物を入れ、全生物が持ちつ持たれつで共生していこう。**上下の関係はなく皆同じ**。そんな社会を作って行こうというので、これを**エコロギア**と呼んでいる。エコロギイは社会の作り方のことで、上下関係はもう止めようということである。



※以上は、3月26日に行われた講演会を録音し、要旨を文字化したものです。

・・・今後の行事予定・・・

公開講座：『自然談話室』

9月9日（金）「生態学のいろは・・・その4」～図鑑の系譜～（話者：小野木三郎）
国内外の博物図を振り返り、シーボルトの「日本植物誌」から飯沼慾斎の「草木図譜」
そして牧野富太郎の「牧野植物図鑑」への流れをたどり、図鑑王国日本での図鑑の上
手な使い方を見つめます。 ※会場は高山市民文化会館、午後7時から

『自然観察会』

☆水生昆虫の調査

7月17日（日）

集 合：午前9時、市民プール駐車場（赤保木町）（小雨決行、増水時中止）

服 装：濡れても良い服装＆足もと （午前中に終了予定です）

当会では初の調査。カワガラスや魚の餌である、水生昆虫がどんな状態か一度調べてみよう！トビケラ、カワゲラ、カゲロウ、トンボなど様々な昆虫の幼虫を採取して種類や数を調べ、川の状態を知ることができます。川上川と宮川の2地点で調査の予定です。

☆アサギマダラ マーキング会

8月28日（日）（荒天の場合、9月4日に延期）

集 合：午前8時、道の駅・ひだ朝日村駐車場

※集合後、乗り合わせて移動します、15時半頃解散予定です。

持ち物：捕虫網（貸出しもあります）、油性フェルトペン（黒・細書き用）、弁当
飲物、メモ用紙、帽子、雨具、日除け対策グッズ、その他

指 導：鈴木俊文さん（岐阜県昆虫分布研究会）

多くの個体が秋になると南西諸島や台湾まで南下することで知られる蝶、アサギマダラ。今年もマーキングの会を開催します。

☆乗鞍の麓・秋の里山こみち Walking

10月23日（日）今年秋の板殿で石仏探訪。詳細は次号でお知らせします。

※各行事の問い合わせ先：松崎（090-4214-5208、ponykun0428@hidatakayama.ne.jp）

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円

あなたの知人、友人に入会をおすすめてください

・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第65号（深緑号）2015年7月10日発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋

TEL：0577-32-7206・FAX：0577-32-7207

★<http://iidalaw.net/norikura.html>

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：松崎 茂

E-mail：ponykun0428@hidatakayama.ne.jp TEL：0577-34-4703

表紙写真提供：小池 潜

印刷：アドプリンター